

研究論文

中島敦と馮夢龍の眼

—「山月記」と『太平広記鈔』「李徴」から見えるもの—

堀 誠

発狂して虎となった李徴をめぐる唐代伝奇小説は、日本近代の中島敦「山月記」に再生したことで知られる。しかも「山月記」は昭和26年(1951)に高等学校の国語科教科書の教材として採用され、今日にいたる安定教材・定番教材と称される教科書環境が生まれている。本稿では、明の馮夢龍が『太平広記』500巻から抄録編訂した『太平広記鈔』80巻の巻72「妖怪部」「妖怪1(此巻皆人妖)」に記載される「李徴」の記述に着眼して、中島敦「山月記」のテキスト創出に関して考えてみたい。

1. 「李徴」と「人虎伝」の周辺

「山月記」が基づいた唐代伝奇小説は、「人虎伝」のタイトルで行われるものであると考えられている。この「人虎伝」は、明の陸楫編『古今説海』「説淵部」・清の陳世熙編『唐人説薈』(『唐代叢書』)に所載のもので、『唐人説薈』には作者として李景亮の名が記される。内容的に、李徴が即興で詩(七言律詩)を詠作する一節が定着し、また虎への変身の事実を「溪に臨みて影を照らす」水鏡の方法で視認するプロットのあることが、「山月記」の素材となったことを考定する上での有力な証左となろう¹。

この「人虎伝」に対して、タイトルの相違はもとより、李徴の即興詩ならびに水鏡による変身の視認のプロットの無い話もある。宋の太平興国3年(978)成立の李昉等奉勅撰『太平広記』巻427「虎」2に記載される「李徴」の一篇であり、この出典は『宣室志』(唐の張誥の撰)と記される。本稿で取り上げる『太平広記鈔』巻72「妖怪部」「妖怪1(此巻皆人妖)」所載の「李徴」は、基本的にこの『太平広記』巻427の所載話に基づくものである。

この李徴の虎への変身をめぐると話は、「李徴」の出典となる『宣室志』を撰した張誥、あるいは『唐人説薈』が「人虎伝」の撰者として記す李景亮がいずれも唐代の人であることから、少なくとも唐代に成立したものと推測される。加えて注目すべきは、時代は新しくなるが、南宋の羅燁の『醉翁談録』巻1「舌耕叙引」「小説開闢」に見える「靈怪」類の「小説」の中に「人虎伝」の文字が記される事実である。ここにいう「小説」は、宋代流行の「説話」(講談)の空間で行われた読み切り短篇型の講談(話芸)に他ならず、「人虎伝」はその講談のタイトル(いわゆる「話本」名)と推測される。

この記載があることによれば、「人虎伝」の名称は、李景亮の作者名が載る明清の叢書の時代から文献的にもより古く宋代に遡り得る。しかもその「人虎伝」が、「小説」と称される読み切り短篇型の講談として語られた事実は、この作品の話芸による大衆社会への流布と受容の歴史の一齣として重要である²。のみならず時間と空間を超えて、日本という異土にも「山月記」として受容されたことは比較文学的観点からも大いに興味深いものがある。

2. 志怪と「異」字の空間

さて、この唐代伝奇小説から時代を遡ると、まさに「怪を志す」と呼称される六朝志怪小説の世界——怪異なできごとや超自然の現象などを素朴に記しとめる性格が強い——には、人間が虎と化したことを伝える話が少なからず認められる。その幾例かを挙げれば、晋の干宝の『搜神記』巻12には、虎に化することのできる江漢の域の羆人の話や、晋の陶潜の『搜神後記』巻4には、蛮族から虎への変身の術を授けられた男の話があるのに加えて、『太平御覧』巻888には、齒牙にかけた女の釵・釧が残るとの「人虎伝」に類似する記載を認める江夏郡安陸県の「薛道恂」（劉宋の東陽無疑の『齊諧記』を引く）の一話もある³。以下に「薛道恂」の話を紹介したい。

太元元年（376）、薛道恂は年22歳で聡明の質であったが、時行病が治ると発狂し、手を尽くすも治癒せず、散薬を服用してひどく狂走し、失踪して虎となり数知れない人を食ったという。注目したのは、桑を採っていた女を食らう場面である。

有一女子樹下採桑。虎往取之食。食竟，乃藏其釵釧，著山石門。後還作人，皆知取之。（一女子の樹下に桑を採る有り。虎往きて之を取りて食らふ。食らふこと竟りて，乃ち其の釵・釧を藏して，山の石門に著く。後還た人と作り，皆知りて之を取る。）

女の釵や釧を隠し、また人に戻っても記憶していてこれを取ったという部分は、ある日、山下を通りがかった婦人を食って殊に甘美を覚えた李徴が、その初めての食味にあわせて、

今其首飾猶在巖石之下也。（今 其の首飾 猶ほ巖石の下に在るなり。）

と語り明かす「人虎伝」の記載を想起させる。

『齊諧記』の釵・釧とは異なるものの、李徴自らが語る女の首飾への言及は、齒牙にかけた人間の性別の一致とともに相似する話素として重要な意味をもとう。その点において、『齊諧記』の話は「人虎伝」の源泉的あるいは祖型的な意味を持つようにも推測されるが、『齊諧記』は、一年を経て家に帰り人に戻った薛道恂は、都へ出て仕官して殿中令吏となったと後日譚を展開する。ある夜、天地の変怪の話題に話し及んで、かつて病を得て発狂し、虎となって一年のあいだ人を食っていたと打ち明けた。薛道恂は、座中に父子兄弟を食われた者がいたため、役所に引き渡されて建康の獄中で餓死し

たと伝える。

志怪小説の場合、その多くが虎と化した人間が再び人間に戻り、虎であったころの体験を語る、あるいは目撃者の前で人間から虎に変わるといった展開をもつ。「薛道恂」の話もその例外ではない。

唐代伝奇小説としての「李徴」あるいは「人虎伝」は、李徴の失踪および袁儻と虎の遭遇にはじまり、虎に化した李徴自身と旧友袁儻との語らいによって展開し、人間に戻ることは無い。その間、「李徴」あるいは「人虎伝」がやはり虎への変身という「志怪」の「異」をより意識して敷衍することは、そのテキストの空間に「異」字が頻出することによって容易に推測される。

「異」字は、朝まだきに袁儻を襲った虎が草中に隠れる場面において、草中から洩れる「人声」の中に初出する。

人声而言曰、「異乎哉。幾傷我故人也。」

（人声にして言ひて曰く、異なるかな。幾んど我が故人を傷んとせりと。）

これを皮切りにして、「異」字の使用は、「李徴」においては8例、「人虎伝」においては13例の多きにいたり、その7例が共通する⁴。この「異」字が作中を多いに機能していることに疑いないが、重要なことは「異」を機軸としながら単に「異」の叙述、すなわち「志怪」の世界に終始していない点である。

3. 史伝の世界

そもそも「李徴」と「人虎伝」は、李徴の伝として、いわゆる史伝のスタイルで筆が起こされ、虎への変身という「異」の世界に導いていく。李徴の発狂と失踪につづいて、袁儻が現れ、朝まだきに襲ってきた虎こそ旧友李徴であったとの不思議な再会により、虎たる李徴とその友たる袁儻との旧交に基づく対話のストーリーが物語を機能する。「人虎伝」の名称は、まさに「人」たる袁儻と「虎」たる李徴を並列して物語を象徴しているとも考えられる。その間、「異」字が多用されるものの、その「異」に由来して生起する李徴の詩人あるいは家庭人としての相克が深長な意味をもつことは言うまでもない。

家族の庇護の依託、李徴の詩篇の筆録に関わる遣り取りに二人の友情が底流し、その情誼にそむかぬ袁儻の行動をもって作品は終結する。ある意味では、李徴の伝の中に袁儻の伝が内包されるがごとくで、とりわけ結末はあたかも輪唱が順次に終わるがごとき趣をもつ。そのように知覚されるのは、筆者のみの僻目であろうか。片や李徴に関する伝は袁儻との別れを以て終わり、片や袁儻に関する伝は南方からの帰朝後に李徴の依託にそむかぬ信義と立身を記して終結するように解釈される。

〔李徴〕

隴西李徴、皇族子。家於虢略。徴少博学、善属文。……

〔袁儔〕

至明年，陳郡袁儔以監察御史，奉詔使嶺南。乘
 伝至商於界，晨將去。……

叙別甚久。儔乃再拜上馬，回視草茅中，悲泣所
 不忍聞。儔亦大慟，行數里，登嶺看之，則虎自
 林中躍出咆哮，巖谷皆震。

後回自南中。乃取他道，不復由此。遣使持書及
 賄贖之禮，計於徵子。月餘徵子自號略入京，詣
 儔求先人之柩。儔不得已，具疏其伝，遂以己俸
 均給。徵妻子免餓凍焉。儔後官至兵部侍郎。

とりわけその袁儔に関する帰京以後の記載は、李徴の伝を補足するものに過ぎないのであろうが、それが究極的に袁儔の伝そのものの終末であるかのごとき錯覚をもたらすものになっていることは否めない事実である。

その交友の軌跡の中に六朝的な「志怪」とは異なる、小説としての生命が宿っていることは言を俟たないが、その「儔後官至兵部侍郎。」の文字をもって一話が終わるとき、まさに袁儔の史伝のフィナーレのごとき余韻が残る。その意味では、むしろ李徴との友情を全うした袁儔の信義こそが顕彰されるかと思われてならない。そこに「人虎伝」の友情と信義というテーマが潜んでいるといえるかも知れない。

4. 中島敦と「人虎伝」

ところで、中島敦「山月記」とその基づくところとなった「人虎伝」との対比において重要なことは、中島がこの「人虎伝」の中に認めた袁儔の信義を示す結末の段落を削除し、虎としての李徴の咆哮をもって詩人としての思い止まない李徴の姿を象徴した事実である。この削去こそ中島が「人虎伝」に吹き込む息吹の根源に他ならず、その息吹は即興詩を詠じたあとに展開する「尊大な自尊心」「臆病な羞恥心」に関わる自己分析的な言説の創出に顕著に表れている。

「人虎伝」は現行の国語科教科書にあっては、大修館書店ならびに三省堂の「古典B」に「漢文」の教材として採用されている⁵。これは「漢文」の学習と現代文における安定教材あるいは定番教材たる「山月記」とを有機的に結ぶ意図に出た教材選定によるものであろうと推測される。その意図を斟酌すれば、じっくりと直に「人虎伝」を読んで「山月記」の創作を考えるとという重層的な展開を機能することが必須の課題となろう。

ただし、教科書に用意された「人虎伝」のテキストにおいては、肝心の最後の部分は、大修館書店「古典B」教科書2種では原文としては採られず「巖谷皆震。」で終わる。しかも、その末段の省略に関わる言及は一切無く、あたかも「人虎伝」にあるがままを示すが如くである。これでは、「山月記」

への翻案の実相を見失わせる結果となりはしないか。

一方、三省堂「古典 B」教科書 2 種では、同じく「巖谷皆震。」で終わると同時に、以下のリード文により代用する現実も確認される。

その後袁儻は南の地方を回り、別の道を通って、この地には立ち寄らなかった。そして、約束どおり李徴の妻子が餓え凍えることがないように取りはからった。

こうしたリード文による代用でもよからうが、これでは「人虎伝」を漢文教材としてせつかく読みながら、その「山月記」への撰取・受容の実相を見損なわせかねないものであり、中島の創作の本質を見逃す結果となりはしまいか。リード文の部分は、原文ではわずか 71 字（「李徴」では 65 字）であるから、労を惜しまず原文で読ませることこそ重要であろうと思われる。やむを得ない場合でも、三省堂「古典 B」のようにリード文で節略された事象を現実として認識させることこそ肝要である。因みに、その切除された「人虎伝」の原文を示せば、以下のとおりである。

後回自南中。乃取他道，不復由此。遣使持書及贖贖之禮，訃於徴子。月餘徴子自虢略入京，詣儻求先人之柩。儻不得已，具疏其伝，遂以己俸均給。徴妻子免餓凍焉。儻後官至兵部侍郎。

（後 南自り回る。乃ち他道を取り，復た此に由らず。使を遣し書及び贖贖の禮を持ち，徴が子に訃せしむ。月餘にして徴が子虢略自り京に入り，儻に詣りて先人の柩を求む。儻已むを得ず，具に其の伝を疏し，遂に己が俸を以て均給す。徴が妻子 餓凍を免る。儻後 官は兵部侍郎に至る。）

この最末段が中島敦によって節略された意味は大きく、中島が何を「山月記」に構想創出したかはこの節略を目の当たりにすることによって端的に想像することができるのではないかと考える。言うなれば、翻案の現実を直視し、中島の意図を体感する絶好の機会にもなるのである。

5. 『太平広記鈔』の「李徴」からの思考

もちろん、この後日譚の部分は「李徴」にも備わるプロットであるが、いま注目してみたいのは、『太平広記鈔』における「李徴」の末尾の記載なのである。

『太平広記鈔』は、明の天啓 6 年（1626）に成った一種のダイジェスト版『太平広記』ということができる。該書は、1980 年に、中国は上海図書館において発見されたと報じられたが、山西省図書館にも蔵せられ、かつ早くに海を渡り、日光山輪王寺の天海和尚（慈眼大師）の蔵書（いわゆる「天海蔵」）にも加わっていたことも知られる⁶。いずれも原本は未見ながら、上海図書館本については、いち早く莊葢・郭群一による「馮夢龍評纂本《太平広記鈔》初探」が『社会科学』（上海社会科学院刊）1980 年第 5 期誌上に発表されたのを嚆矢として、さらに「《太平広記鈔》批語選輯」が『古典文学論

叢』第2輯（1981年9月、齊魯書画社刊）第2輯に掲載された。その一方、1982年11月には中州書画社から莊・郭両氏の校点による排印本『太平広記鈔』上冊が刊行されはじめ、翌83年2月に中冊、4月に下冊と順次に刊行された。加えて、1993年には『馮夢龍全集』（全43冊、上海古籍出版社刊）の第31～34巻に4冊本の体裁で影印出版されて、明末文壇の大立者である馮夢龍に関わる待望の書を机辺に備えてテキストの実相を探ることができるに至った⁷。

その巻72所載の「李徴」は出典を明記しないが、『太平広記』巻427所載の「李徴」のテキスト⁸と具体的に対比すると、『太平広記鈔』の「李徴」のテキストは、〔資料〕に示した通り、ほぼ『太平広記』を襲用し、すでに指摘した8つの「異」字（〔資料〕にゴチック体で示す）もすべて備わるところである。ただ決定的に相違するのは、後日譚となる、任を全うして南方から都に戻った袁愔の行動に関わる叙述の扱いである。その最終盤の65文字（〔資料〕参照）がすべてカットされていることが明らかである。

つまり、『太平広記鈔』の「李徴」は、虎となった李徴と人たる袁愔との別れをもって話を終わるのであり、その方法は、中島敦が「山月記」に体现したストーリーと同様であることを見逃してはならない。まさに『太平広記鈔』の評纂者である馮夢龍は、袁愔の信義にまつわる叙述を削除して、李徴の身に生じた「異」を際立たせたといえまいか。その眼差しは、中島敦の「山月記」の二人の別れをもって終結する叙述の先蹤と評すべきものである。いわば袁愔の信義にもとらぬ行動、すなわち後日譚の記載は無用にして蛇足と解された結果といえる。その蛇足をカットしてこそ「李徴」という一個人の人生を象徴し得るものといえる。

因みに、「山月記」に認められる「異」字についても検証すれば、「人虎伝」に基づいた「自分は今や異類の身になっている。」の「異類」、また李徴の詠じた即興詩の頸聯上句の「異物」の2例が直接的に継承される他、虎との語らいに際しての「其の時、袁愔は、この超自然の怪異を、実に素直に受容れて」の「怪異」、即興詩の詠作直後の「人々は最早、其の奇異を忘れ」の「奇異」に新たな2つの「異」字を含む熟語を認めることになる。その「怪異」や「奇異」の中にあつて、人間として自ら精魂をこめた詩篇の行く末を慮り、かつ家族の生活を袁愔に依託せざるを得ない切ない李徴が確かに存在する。

袁愔との別れの中に、如何ともしがたい李徴の思いと人生が凝縮されるのであり、袁愔の後日譚的な叙述は無用の長物と化して霧消したといえる。馮夢龍と中島敦に共通する作家の眼力は「李徴」と「人虎伝」という素材が魅力を輝きます慧眼であつたと考えられる。そこに顕現した文学的な相似形をめぐって一步を進めて考えれば、中島敦がものしたその形象化は、馮夢龍の「李徴」に対する後日譚の切除という評纂者の行為の範疇を越えて、「人虎伝」に依りつつ李徴の詩人と家庭人としての相克を描いては自身の性情を自己分析せしめる「山月記」の記たる所以のプロットを創出したといえまいか。ここに新たな息吹が注ぎこまれたといえる。

「人虎伝」、二つの「李徴」、⁹「山月記」の対比対照を試みると、この末尾の切除は「山月記」に息吹を吹き込む要訣の意味をもち、かくて李徴の伝としてのテーマ性が明瞭に決定づけられたと考えら

れる。中島の「山月記」における創作を考える上での、「人虎伝」「李徴」との比較検討に由来した一つの思考の試みである。

【注】

- 1 従来、李徴が即興詩を詠作するプロットの有無が「人虎伝」を「山月記」の典拠と決定づける大きな理由と理解されてきたことは否めない。それと同時に、ここに指摘した李徴が虎への変身を自ら視認するプロットの有無もまた「李徴」と「人虎伝」との間の相違点であり、大いに着目すべきポイントであろう。なお、中島は『国訳漢文大成』文学部第12巻「晋唐小説」（1920年12月、国民文庫刊行会刊）所収の「人虎伝」に依ったものとも見られている。
- 2 今村与志雄訳『唐宋伝奇集』下（1988年9月、岩波文庫、岩波書店刊）「四〇 李徴が虎に変身した話」訳注に指摘するように、明末のころの白話短篇小説集である『醉醒世』（東魯古狂生著）第6回には、「高才生傲世失原形（高才の生世を傲りて原形を失ひ）義気友念孤分半俸（義気の友 孤を念ひて半俸を分く）」の題で、話本（短篇講談テキスト）による「人虎伝」が書かれており、宋代話芸としての「人虎伝」が彷彿されることを付言する。
- 3 『太平御覧』巻888「妖異部四」「変化下」の他、『太平広記』巻426「虎1」にも『齊諧記』を出典として収載する。前者は人物名を「薛道詢」とするが、後者は「師道宣」に作る。また、『太平広記鈔』巻72「妖怪部」「妖怪1（此巻皆人妖）」には「師道宣」の題で引かれる。魯迅『古小説鈎沈』の「齊諧記」には、「薛道詢」とする。『中国古典小説選2』（搜神記・幽明録・異苑他〈六朝I〉、佐野誠子、2006年11月、明治書院刊）「禽獣13」「男がトラに（薛道詢）」の「余説」で、「人がトラになる話は、唐代になると李景亮の「人虎伝」が書かれ、それを下敷きの中島敦の「山月記」が書かれた。」とコメントする。
- 4 この「異」字をめぐるのは、「人虎伝」から「山月記」の空間を再考する一志怪・伝奇と日本近代の位相一」（『早稲田大学国語教育研究』第35集、2015年3月、早稲田大学国語教育学会刊）に論じたので、詳細は略す。なお、その論考は、「中島敦における「記」と「伝」—「山月記」に向けて—」（『中国詩文論叢』第28集、2009年12月、中国詩文研究会刊）、「月への咆哮—中島敦「山月記」考—」（『早稲田大学国語教育研究』第30集、2010年3月、早稲田大学国語教育学会刊）という先行する拙文に連なるものである。また、「国語科教材の中の杜甫」（『生誕千三百年記念杜甫研究論集』所載、2013年10月、研文出版刊）においても、月と望郷の思いを論ずる中で、「山月記」を「鏡」と「月」が機能する小説と位置づけた論説を試みている。
- 5 大修館書店『古典B』『漢文編』（平成25年3月検定済）・『精選古典B』（平成25年3月検定済）、三省堂『高等学校古典B』『漢文編』（平成25年3月検定済）・『精選古典B』（平成25年3月検定済）。
- 6 長沢規矩也編『日光山「天海蔵」主要古書解題』（1966年11月、日光山輪王寺刊）に著録・解題される。
- 7 眉批、辺批、夾注、後評を含めたいわゆる「評纂」の検討はしばらく擱いて、『太平広記鈔』における原本『太平広記』からの取捨節略の様相を検討してみようとする、意外なことに『太平広記』の原載箇所を容易にさがし得ぬ場合が多いのである。というのは、『太平広記』本来の篇目を必ずしも襲用せず、新たな篇目を採用しているものが相当数あるからである。この方面の確認は必要不可欠であり、それなくして「評纂」の実態は探り得ぬことにもなる。1989年10月刊の『中国詩文論叢』第8集（中国詩文研究会刊）に『太平広記鈔』篇目索引』を公刊し、『太平広記鈔』の篇目に対応する『太平広記』の原載巻数・原題などを併記したところである。
- 8 『太平広記』は、いわゆる談愷本の第三次印本を底本として諸本と対校した張国風会校『太平広記会校（附索引）』（2011年11月、北京燕山出版社刊）による。

【資料】『太平広記鈔』卷72「李徴」

『太平広記』卷427「李徴」から省略された文字を(…), 増入された文字を〔…〕と示す。

隴西李徴，皇族子。家於虢略。(徴)少博學，善屬文。(弱冠從州府貢焉。)時號名士。天寶十載春，(於尚書右丞楊沒榜下)登進士第。(後數年,)調補江南尉。徴性疎逸，恃才倨傲。不能屈跡卑僚。嘗鬱鬱不樂。每同舍會，既酣，顧謂其群官曰，「生乃與君等爲伍耶。」其寮佐咸嫉之。及謝秩，則退歸閉門，不與人通者近歲餘。後迫衣食。乃(具粧)東遊吳楚之間，以干郡國長吏。吳楚人〔素〕聞其聲(固久矣)。及至，皆(乃)開館(以)俟之。宴遊極歡。〔周歲〕將去。悉厚遺〔贈〕(以實其囊橐。徴在吳楚且歲餘。所獲饋遺甚多。)西歸虢略。未至，舍於汝墳逆旅中。忽被疾發狂，鞭撲僕者。僕者不勝其苦。如是旬餘，疾益甚。無何，夜狂走，莫知其適。家僮跡其去而伺之。〔至〕(盡)一月(而徴)竟不回。於是僕者驅其乘馬，挈其囊橐而遠遁去。至明年，陳郡袁儻以監察御史奉詔使嶺南。乘傳至商於界。晨將發。其驛吏白曰，「道有虎暴(而食人。故)過(於)此者，非晝(而)莫敢(進)。今尚早。願且駐車。(決不可前。)」儻怒曰，「我天子使，衆騎極多。山澤之獸能爲害耶。」遂命駕去。(行)未盡一里，果有虎自草中突出。儻驚甚。俄而虎匿身草〔間〕(中)。人聲而言曰，「異乎哉。幾傷我故人也。」儻聆其音似李徴。儻昔與徴同登進士第。分極深。別有年矣。忽聞其語，既驚且異。而莫測焉。遂問曰，「子爲誰。得非故人隴西子乎。」虎呻〔吟〕(唵)數聲，若嗟泣(之)狀。已而謂儻曰，「我李徴也。君幸少留，與我一語。」儻即降騎，因問(曰)，「李君(李君)，何爲(而)至是(也)。」虎曰，「我自與足下別，音問曠阻(且久矣)。幸喜得無恙(乎)。今又去何適。向者見君，有二吏驅而前，驛隸挈印囊以導。庸非爲御史而出使乎。」儻曰，「近者幸得備御史之列。今乃使嶺南。」虎曰，「吾子以文學立身，位登朝序，可謂盛矣。況憲臺清峻，分糾百揆，聖明慎擇，尤異於人。心喜故人居此地，〔大〕(甚)可賀。」儻曰，「往者吾與執事同年成名，交契深密，異於常友。自聲容間阻，時去如流，想望風儀，心目俱斷。不意今日，獲君念舊之言。雖然，執事何爲不我見，而自匿於草莽中。故人之分，豈當如是耶。」虎曰，「我今不爲人矣。安得見君乎。」儻即詰其事。虎曰，「我前身客吳楚。去歲方還，道次汝墳，忽嬰疾發狂走山谷中。俄以左右手據地而步。自是覺心愈狠，力愈倍。及視其肱髀，則有鬣毛生焉。(又)見(冕衣而行於道者，負而奔者，)翼而翱者，鬣而馳者，則欲得而〔啖〕(啗)之。既至漢陰南，以饑腸所迫。值一人腩然其肌。因擒以咀之立盡。由此率以爲常，非不念妻孥，思朋友。直以行負神祇，一旦化爲異獸。有視於人。故分不見矣。嗟夫。我與君同年登第，交契素厚。今日執天憲，耀親友，而我匿身林藪，永謝人寰。躍而吁天，俛而泣地，身毀不用。是果命乎。」因呼吟咨嗟，殆不自勝。遂泣。儻〔因〕(且)問曰，「君今既爲異類。何尚能(人)言耶。」虎曰，「我今形變而心甚悟。(故有撞突、以棟以恨、難盡道耳。)幸故人念我。(深)恕我無狀(之咎)、亦其願也。然自南(方)回(軍)，我再值君，必當昧其平生耳。此時視君之軀，猶吾機上一物，君亦宜嚴其警從以備之。無使成我之罪。取笑於士君子。」又〔云〕(曰)，「我與君眞忘形之友(也。而我)將有所託。(其)可乎。」儻曰，「平昔故人，安有不可哉。(恨未知何如事。)願盡教之。」虎曰，「君不許我。(我)我何敢言。今既許我，豈有隱耶。初我於逆旅中，爲疾發狂，既入荒山。而僕者驅我乘馬衣囊悉逃去。吾妻孥尚在虢略，豈念我化爲異類乎。君若自南回，

爲齋書訪吾妻子。但云我已死，無言今日事。幸記之。」又曰，「吾於人世且無資業。有子尚稚，固難自謀。君（位列周行，）素秉風義。（昔日之分，豈他人能右哉。）必望念其孤弱，時賑其〔困〕乏。無使殍死（於）道途，（亦）恩之大者。」言已又悲泣。慘亦泣曰，「慘與足下休戚同焉。然則足下子亦慘子也。當力副厚命。又何虞其不至哉」。虎曰，「我有舊文數十篇未行於代。雖有遺稿，盡皆散落。君爲我傳錄。誠不能列文人之闕。然亦貴傳於子孫也。」慘即呼僕命筆，隨其口〔錄之〕（書），近二十章。文甚高，理甚遠。慘閱而歎者至於再三。虎曰，「此吾平生之素也。（安敢望其傳歟。）又曰，「君銜命乘傳，當甚奔波。今久留驛隸，兢悚萬端。與君永訣。」異途之恨，何可言哉。慘亦與之叙別，久而方去。（慘自南回，遂專命持書及贈賻之禮，寄於徵子。月餘，徵子自號略來京詣慘門，求先人之柩。慘不得已，具疏其事。後慘以己俸均給徵妻子，免饑凍焉。慘後官至兵部侍郎。） 出『宣室志』